

身体表現プロジェクトの自己組織化を検討する —— 保育学生の総合的な人間力向上をねらうダンス授業の試み ——

池田（尾畑） 三鈴

はじめに

保育者として養成期にある学生が、仲間と共に舞台を制作し上演を行うダンス授業の実践は、表現力の育ちを引き出すと同時に、多様な人間的学びの場を生み出す可能性を持っている。古市らが「表現は表現できる場を得て価値の出るものである」という立場をとるように、その実践が行われている養成校においてはその教育的価値への眼差しが向けられている。保育者としての身体や表現体験を獲得するのみならず、人と協働することの素晴らしさや、他者の表現に触れながら自己表現に出会う、イメージを作品という形にすることで他者との共感体験を深めるなど、その学習実践では多様な教育的価値が見出されている。

こうした問題意識の背景には、2012年の中央教育審議会において提示された、教職現場の初任者における基礎的な力（コミュニケーション能力やチームワーク力）不足の指摘や、教員養成課程における総合的な人間力の育成の課題が挙げられる。つまり、保育者として社会に出てからも主体的に学び続ける力や新たな学びを展開していくための実践的指導力を培うために、養成課程ではその学びの場をいかに仕組むかが大きな焦点となってくるといえるだろう。そして学習者本人が、いかに主体的に学びを展開する場を踏めるか、指導者や養成機関が総合的な学びの仕組みや学習指導法を実践できるか、といった双方向の学習のあり方が問われる時代がきたといえる。

研究目的

これまでダンスや身体表現の授業展開や題材の扱い方、手法についての研究、現場の対象年齢児に沿った課題の研究等は数多く見られるが、高等教育のダンス授業における50人以上の組織の中での学びや人材育成としてのダンス学習に特化した研究はなかなか見当たらない。また佐藤が、カリキュラムを「学校において教師と子どもが創造する教育経験の総体」あるいは、「教師が組織し、子どもたちが体験している学びの経験（履歴）」ⁱⁱと定義するように、「学ぶ側にとっての意味」からダンス、身体表現の学習体験のあり方や方法を検討したものも数が少ない。

拙者は1996年より、こうした時流と構想を取り込み、保育者養成課程のある大学・短期大学において、主体的な学びの形とは何かを模索し、継続的に全員稼働型の身体表現プロジェクトの実践を行っている。保育者として養成期にある学生が、仲間と共に舞台制作を行い、上演まで至るこのダンス授業の実践は、保育者にとって不可欠な表現力の育ちを引き出すと同時に、多様な人間的学びの場を創出してきた。保育者養成課程における位置付けや実践形態については、様々な試行錯誤を繰り返す中で、「アクティブ・ラーニング」「プロジェクト」「原体験」の概念を手がかりとして検討し、学習者における実践知としては「達成感」「自信」「貢献」の三つのキーワードを導き出してきたⁱⁱⁱ。しかし、同時にその現象の多様性からこの

事実を科学的に実証することはとても難しいという壁にぶつかってきた。その最も大きな理由としては、身体や表現にまつわる事象が、極めて個別性が高く多様であること、言葉という手法で十分に実証や説明するための概念や適切な用語もまだ準備できていないことが挙げられる。

そこで本研究では、これらの考察を経て、学習者が「個」ではなく「チーム」として主体的に組織化し、舞台製作や作品創作を共通目標とした創造性と効率性を両立していく「自己組織化」^{iv} という現象に着目することにより、その組織化の過程に総合的な人間力向上のプロセスがあり、成功パターンや失敗パターンが存在すると仮定する。そしてそれらを立証するため、学習者から得た自由記述データの計量的な分析を通して、保育学生の総合的な人間力向上をねらうダンス授業（身体表現プロジェクト）のその学習の場で生じている自己組織化の実態把握と実践指導への手がかりをつかむことを試みる。

研究方法

- ① 文献研究：保育者の専門性に関わる資料ならびに、ダンスによる人材開発・育成に関する先行研究
- ② KH Coder を用いたテキストマイニングの手法による自由記述テキストの計量的分析
 - ・調査対象：
都内 T 短期大学幼児教育科、「幼児体育 B（身体表現）受講生（2 年生）、193 名（前期 97 名、後期 96 名）
 - ・調査期間：
予備調査：2015 年 4 月 11 日～2015 年 7 月 31 日（前期授業、全 15 回） 回収率 84%（97 名中 81 名）
本調査：2015 年 9 月 24 日～2016 年 1 月 29 日（後期授業、全 15 回） 回収率 92%（96 名中 88 名）
 - ・事後調査実施日：
予備調査：2015 年 7 月 31 日（前期 15 回目）、本調査：2016 年 1 月 29 日（後期 15 回目）
 - ・分析手順：
 1. 予備調査データを基にした質問項目の洗練と、即応力・人間力を培うと想定される場面の抽出（池田，2015 の研究に基づく分類）
 2. 即応力・人間力を培うと想定される場面と学習者の言述のマッチング
 3. 本調査データを基にした KH Coder（Mac 用 2.00e）による、事後調査アンケートの自由記述（テキスト）データの計量的分析。質問項目ごとに抽出された語を出現頻度と関連性によって結びつけることによって、共起ネットワークを作成する。
 4. 即応力・人間力向上をねらう場面と学習者の言述から作成した自己組織化マップと共起ネットワークを元に、自己組織化の実態を把握する。
 5. これら一連の結果分析により身体表現プロジェクトにおける自己組織化の様相を明らかにし、そこで築かれる学びの状況を言及する。

先行研究

- ・池田（尾畑）三鈴 「保育者養成課程における表現体験を考える ― ダンスパフォーマンス企画“ALIVE”の制作事例より ―」 東京立正短期大学紀要第41号 2013年 60-78頁
- ・池田（尾畑）三鈴 「身体表現プロジェクトが保育学生にもたらす原体験を考える ― 養成課程におけるプロジェクト学習の位置付けと方向性の検討より ―」 東京成徳短期大学紀要第49号 2016年 1-23頁
- ・廣兼志保 「教員養成課程における間身体コミュニケーション力育成のための評価システムの構築」 科学研究補助金研究成果報告書（基盤研究C） 2013年
- ・古市久子、伊藤数馬 「総合表現の教育的価値は何か～哲学的視点から考える～」 東邦学誌第42巻第2号 2013年 65-82頁
- ・保崎則雄 「アート活動（演劇、美術）を組み込んだ教員養成カリキュラムの開発、実践、評価」 科学研究補助金研究成果報告書（基盤研究C） 2011年

語義規定

「自己組織化」とは

本研究で使用する「自己組織化」とは、複雑系科学の概念である「自律組織化」という現象を、経営学者である野中が著書『全員経営』において、人間の組織に当てはめ使用する概念である。「自律組織化（self-organization）」とは、自然界や動物界にあるものが自らを組織立て、自律的に秩序を持つ構造を作り出す現象のことである。例えば、幾何学的な構造を持つ結晶の生成や動物の体表や羽の模様、DNAの二重螺旋構造のように、分子が自発的に集まって構造と機能を生み出す現象がそれにあたる。野中によれば、自己組織化において個人は「組織やチームのメンバーが全体の目的や目標を達成するよう、自分の役割と価値を理解し、自らを動機づけながら自律的に動く。その結果、メンバーの力の総和より高度な知が創発されるような組織のあり方、それが自己組織化です。そこでは創造性と効率性の高めることができます。」と述べ、一人ひとりの実践的な知を発揮し結集することによって、チームや組織は「自己組織化」し、これが全員経営の要件の一つになると説明している。身体表現プロジェクト実施における基本設定である「全員稼働の原則」においても極めて類似した状況が生まれていることから、本研究では野中の用いる「自己組織化」の語義を引用することとする。

1. 身体表現プロジェクトの自己組織化を検討する背景

(1) 保育学生の「保育者としての専門性」の育ちを引き出すために

ダンス授業という一般的なには、初等教育から中等教育に至るまでの学校体育におけるダンスのイメージが強いのではないだろうか。拙者もその一人であり、大学院に至るまで舞踊を専門とした研究と実践を重ねてきた。しかし現在、拙者の勤務する大学は幼児教育に特化された短期大学であり、より幼少期にある人間教育の担い手となる保育者の育成に関わる高

等教育機関である。東京都内に位置する本学は、歴史ある保育者養成課程として主に東京都、埼玉県に年間約200名前後の卒業生を保育者として現場へ送り出すという現状を持っている（Fig. 1）。拙者はこうした養成校で、年間約200名という保育学生を現場へと送り出す中で、表現学習にとどまらない人材育成という側面でのダンスの重要性を感じるようになった。そして、現在急激に保育者が不足する社会状況の中で、「保育者の専門性とは何か」という原点に立ち戻りながら、養成期の人材育成プログラムを再構築し、基準に適合した保育者を輩出することが養成校における喫緊の課題としてとらえるようになった。

こうした現状は、他の特に2年制の養成校においても同様の課題があり、短い期間で基準に適合した人材を育成するという点で、学習形態や方法の工夫、仕組みの見直しが必要となってきた。中でも実技（演習）科目では、30～50名の受講者が同時進行で活動し、濃度の高い学習過程を得るためには、指導者の知恵と工夫が不可欠といえるだろう。

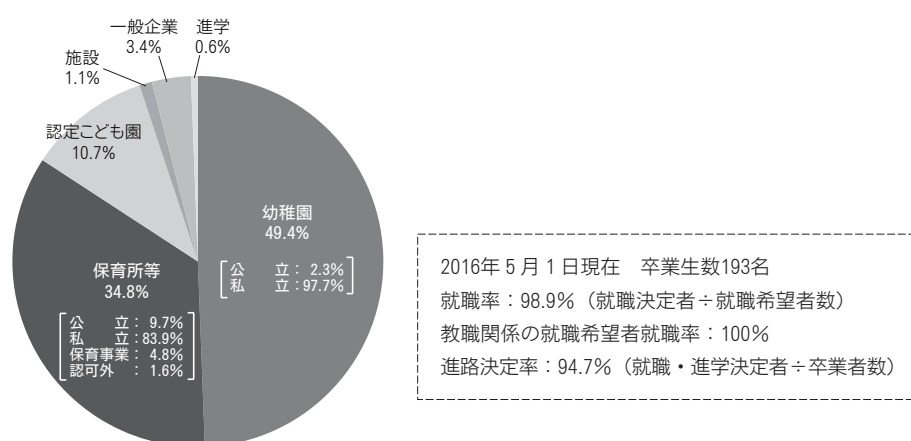


Fig. 1 T短期大学における2016年度の就職状況

一方、こうした養成機関における現状と共に、平成25年度全国保育士養成協議会の専門委員会課題研究報告書では、「保育者の専門性についての調査－養成課程から現場へとつながる保育者の専門性の育ちのプロセスと専門性向上のための取り組み」が示された。そこでは、保育者の専門性は「基礎力、態度、知識・技能」の3つに分けられており、中でも養成課程において期待される内容には、それぞれ「社会的マナー・仕事に取り組む姿勢、社会的態度」、「他者に対する愛情・思いやり、使命感を持って子どもと接する基本的態度」、「発達理解・基本的知識」と示された（Fig. 2）。

つまり、保育現場において要求される保育者の質を保证するためには、発達理解などの基本的知識を踏まえていることを前提として、「保育者としてのマナー」や「仕事への姿勢」、「社会的な態度」、「人間性や社会性を伴った他者や子どもに対する基本的態度」の重要性が示されたといえる。さらに、こうした期待に加えて、他方では保育者の専門性である保育実践は、教室の一斉講義で学べるものではなく、アクティブ・ラーニングのように実践力を磨くものでなければ役立たない現実とのズレが指摘されているとする研究も見られるようになり、現場においてはより学習者が主体的に取り組む且つ、双方向の学習方法・過程の中での実践的な学びが必要とされてきている。

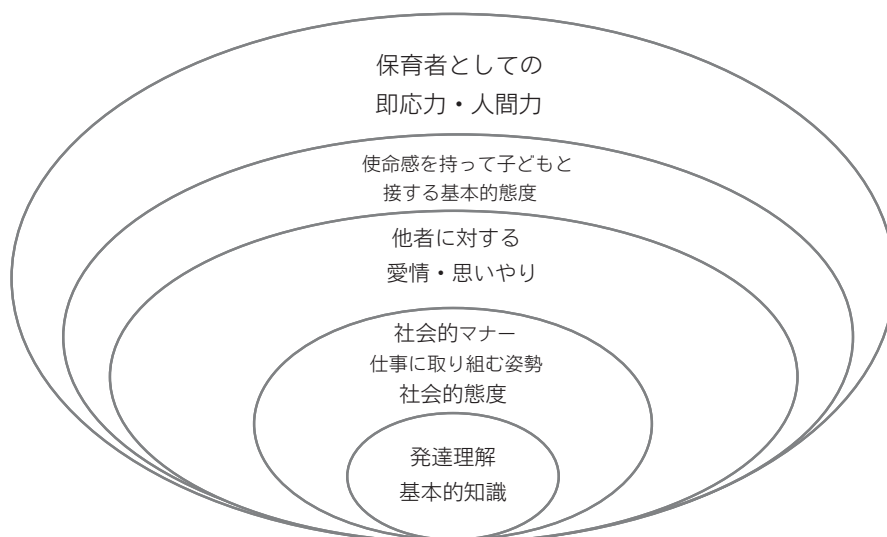


Fig. 2 養成課程において育ちが期待される保育者の専門性
(「平成25年度専門委員会課題研究報告書」より池田作成)

以上、養成機関と社会的な背景からは、保育者としての専門学習と共に、その人間の育ちを後押しする学びのあり方が今後より重要となってくることが予測される。本研究で着目する身体表現プロジェクトにおいても、各種養成課程における保育学生に特化された「表現技能と知識」を習得するものであると同時に、保育者としての基礎力である「社会的マナー・仕事に取り組む姿勢、社会的態度」、「他者に対する愛情・思いやり、使命感を持って子どもと接する基本的態度」を人間力や即応力と捉え、これらを総合的に磨き上げる場を提供する側面を合わせ持つものとして検討する必要があると考えられた。

(2) 養成課程におけるウェブ状の学びを集結する場として

もう一点、保育学領域独特の学びのあり方として、蜘蛛の巣（ウェブ）状の学びという形態もその特性として踏まえておく必要があるだろう。保育の5領域に対する解釈にもあるように、保育者の育成では、ひとつひとつの講座が独立していながらも、互いに近い場所に隣接しており、「子ども」というワードで結びつけられている。それぞれの学びが何重もスパイラル状に重なり、学習者の保育観や、子ども像、保育者像を形成していく。つまり、隣接する5領域をはじめ保育や福祉、教育の領域はそれぞれが「保育者」という人材を育てていくために常に影響しあい、重なり合いながら学びを構築しているといえるだろう。例えば、学習者が一時限前の講座で受講した子どもの心に寄り添う「幼児理解」での学びが「身体表現」の講座における仲間の感性への共感や理解につながることもあるであろうし、粘土をさわり形や色の必然性を発見する「造形」で体感した言葉で得られない触覚や素材から生まれる表現体験は、身体表現の講座で“もの”や“こと”を感覚的にとらえ、身体表現として還元する方法を引き出す可能性があるだろう。

即ち、日々学ぶ各講座における専門的な学びは、蜘蛛の巣（ウェブ）状に広がり関連付けられながら、保育者としての礎として、学習者独自のアイディアを具現化する多様な手法と

して学生の身体にインプットされていくと考えられる。そしてこれらの学習成果が身体表現プロジェクトという「表現の場」に集結し、異教科間の総合的な関連と多様な表現学習の集合体として学習者自身が融合させていくと考えられる。

(3) ダンス授業を組織化することで、ダンスの学びに“人間力”を掛け合わせる

身体表現（ダンス）の学習は、特に乳幼児期においてコミュニケーションの大部分を司る「身体」を用いた重要な学習の一つであり、手法の獲得のみならず、その使い方や暗黙知的な領域に触れるための重要な科目の一つといえる。つまり、「身体でものごとを捉える力（身体的感性）」が高まれば、保育における様々な場面での即応性や共感など、人間的な応答能力が大きく変わっていく可能性を秘めているといっても過言ではない。人と人の力が合わり人間という社会が形成されるように、一人以上の力が合わさることで生まれる力の壮大さは、他者との協働の中でしか引き出されない学びである。ダンス授業を「個人」の学習成果から組織化された集団による学習成果として成立させるためには、個人と個人を結びつける“人間力”が不可欠である。人と物事を創るとは、異質なものを受容したり拒否したり、必要な意見を主張し、折衷し、共に行動することによって成り立つものである。

こうしたダンスや身体表現の持つ力を活用し、企業や組織の人材育成の場でインプロ学習を導入する高尾によれば、「インプロ（即興）をとおして、物語、創造性、協働のことについても学んでいくうちに、（中略）副産物として様々な学び」^{vi}があったという。同様に、拙者も長い舞踊経験の中で、ダンスは人間教育であること、日常的な様々な事象を捉える感性がなければ舞踊は生まれないと感じてきた。こうしたダンスの教育的な力を生かした組織教育の事例としては、他に「ヤングアメリカンズ」^{vii}のアウトリーチ活動が著名であろう。このヤングアメリカンズにおいては、表現の共通言語は音楽であるが、その実践の教育的目的は、音楽・ダンスの技術向上や、英語を学ぶことではない部分に置かれている。具体的には20数曲の歌やダンス、そしてパントマイムなどの英語によるワークショップを通じて、次の4つのことを体験の中から学んでいくプログラムとして紹介されている^{viii}。この他、日本の企業でも初年度研修にダンスを取り入れる例も見られる。これらは「ダンスや音楽などの表現媒体を用いた組織的な教育の事例」として注目することができるだろう。しかし、まだまだこうした組織的な教育的実践の事例は少数である。従って、非日常的な時空間で自他とのノンヴァーバルなコミュニケーションを肌で感じることでできる場＝すなわちダンス授業のあり方を言及し、そこに立ち上がる組織化のプロセスを明らかにすることは、学習者の学びの主体性や指導のあり方を検討する上で非常に有益な情報になり得ると考えられる。

2. 「自己組織化」の実態を探る -学習者の自由記述を手がかりに

(1) 身体表現プロジェクトにおいて培われると想定される即応力・人間力の分類

また、こうした実践を伴う学習活動においては、アクティブ・ラーニングとしての視点が欠かせない^{ix}。アクティブ・ラーニングに関する先行研究は、多種多様にみられるが、本研究では文部科学省の提示する最も基本的な形を維持するものとして小林の提示するアクティブ・ラーニングの構図を用い、身体表現プロジェクトの過程において培われる即応力・人間力にあてはめ検討している（Fig. 3）。

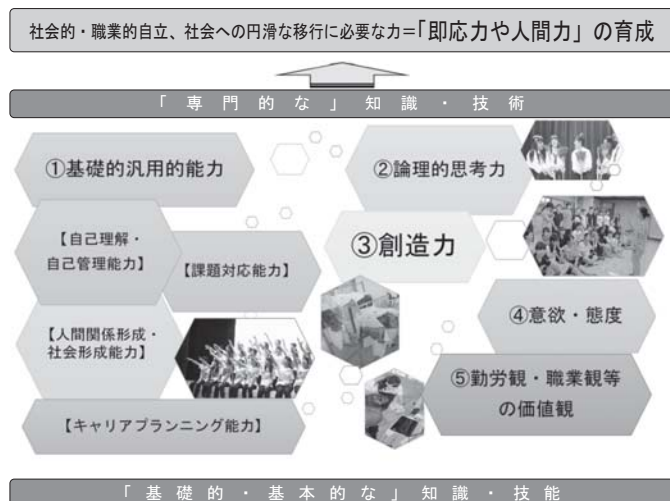


Fig. 3 身体表現プロジェクトにおいて培われると想定される即応力・人間力の分類* (池田,2015)

(2) 身体表現プロジェクトにおいて即応力・人間力を培うと想定される場面の検討

また、これらの能力が育成される具体的な学習場面を、学習者の自由記述より整理すると、Table 1 のようになった。(註；自由記述からの抽出であるため、今後も精査が必要である)

Table 1 身体表現プロジェクトにおいて即応力・人間力を培うと想定される場面^{xi} (池田,2015)

即 応 力		場 面
①基礎力・汎用的能力	【課題対応能力】	制作・創作過程で分からないことや人との意見衝突などに出くわした際、その都度自分で調べたり、探したり、仲間と意見交換するなど行動によって対応する場面
	【人間関係軽形式・社会形成能力】	グループで良いものを創るために、役割分担を検討し、周りとのバランスを考えながら作業と創作に打ち込む場面
	【自己理解・自己管理能力】	グループ活動の中で、仲間と交流する過程で、仲間と自分が異なる感じ方やアイディア、長所を持っていることに気づき（「自己理解」の深化）、受容・拒否・折衷する場面
	【キャリアプランニング能力】	プロジェクト全体における自分の役割や立ち位置を把握しながら活動することで、自分に出来ることや長所に気づき、役割に責任を持ちやり遂げるこの意味を理解していく場面
②理論的思考力		アイディアや作品創作の進め方を説明したり、人に質問したりする場面、仲間と共に計画的に合理的に制作作業を進めていく場面
③創造力		踊り方、動き方、構成配置、音の取り方、衣装デザインと制作・音源探しと編集などの創作過程におけるすべての場面、表現のアイディアを想像、発見し、生み出す場面
④意欲・態度		全体を進めながら、グループで共同することの心地よさや面白さに出会い、協働すること、自身の役割を責任を持って努める場面
⑤勤労観・職業観などの価値観		本番が近づく緊迫感や他教科との両立の中で、効率的に実益を上げること、皆と協力し集中して乗り越える努力をお互いに感じ合う場面、限られた時間の中で必要な努力と成果をあげていく場面、疲労と達成感を同時に感じる場面

(3) KH Coder によって作成した自己組織化マップを用いた実態把握

ここでは、身体表現プロジェクトの事後調査アンケートにおける学習者の自由記述データを KH Coder (2.00e) を用いてふるいにかけ、テキストマイニングの手法を用いて分析ⁱⁱⁱすることにより、このプロジェクトの様々な場面を通して「学習者がどのような力や感情を発揮しているか」或いは「その過程でどのような力や感情を得ているか」といった、学習者一人ひとりにもたらされている状況をとらえる。テキストマイニングのソフトを用いることで、客観的に整理し、恣意的な解釈や指導者の主観から離れた分析を行うことをねらう。本研究では、抽出語より作成された「自己組織化マップ」を分析資料として用い、共起ネットワークが示す構図から語と語結びつきの強いものに注目することで、学習者の置かれる状況の全体像を捉える。今回分析対象としたデータ数、KH Coder を用いて前処理を行った文章の単純集計時の段落、文の数、総抽出語数（分析対象ファイルに含まれるすべての語の延数）、異なり語数（何種類の語が含まれていたかを示す数）、その中で助詞や助動詞のような分析の対象にはならない語を除外し、分析に使用した語の数は質問項目ごとに示した（Table 2）。分析対象とした抽出後数を見ると、「今後どう伸ばすか」「今後どう補うか」「子どもの表現援助での留意点」など、次への展望を記す項目においてより多くの語数と異なり語数が抽出された。

Table 2 各質問項目において抽出された語数

質問項目	分析対象データ数	段落	文	総抽出語数	異なり語数	分析対象とした抽出語数	分析対象とした抽出語の異なり語数
1-1 良かった点	88	89	332	2,234	397	903	287
1-2 どう伸ばす	88	88	323	2,620	482	1,105	358
2-1 反省点	88	88	318	1,956	403	789	289
2-2 どう補う	88	88	314	2,330	494	1,001	356
3 子どもの表現援助	89	89	277	3,230	546	1,062	380
4 身体表現全体	89	89	511	5,755	761	1,948	512

質問項目① 身体表現の講座を通して感じたあなた自身のよかった点と今後どう伸ばすか

質問項目①「よかった点」、「今後どう伸ばすか」についての記述をもとに「自己組織化マップ」と語と語の結びつきの強さを見る「共起ネットワーク（サブグラフ）」を作成した結果、Fig. 4～7のようになった。

1-1 「良かった点」において発見された主なクラスター（以下、抽出頻出度の高い用語から並記）

次数を中心とした分析の結果、「良かった点」においては「**経験**」というワードが核として抽出され、その周辺に「舞台裏」「舞台」「感情」「味わう」などが強く関連付けられていた。その他、抽出語のクラスターは「知る－身体－動かす」、「伝える－思う」、「言う－合える－持てる」、「創る－上げる－話す－増える」、「受け入れる－他者」などであった。

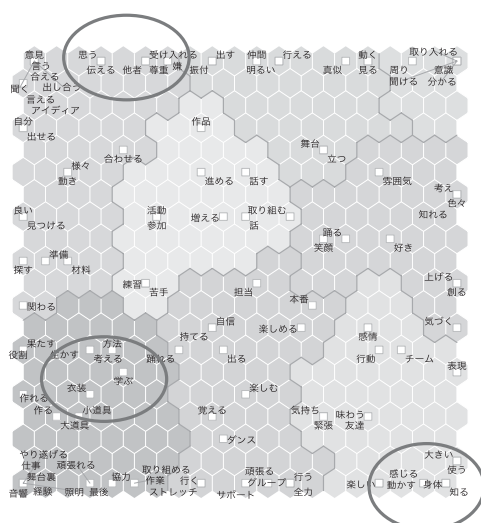


Fig. 4 あなた自身の良かった点（自己組織化マップ）

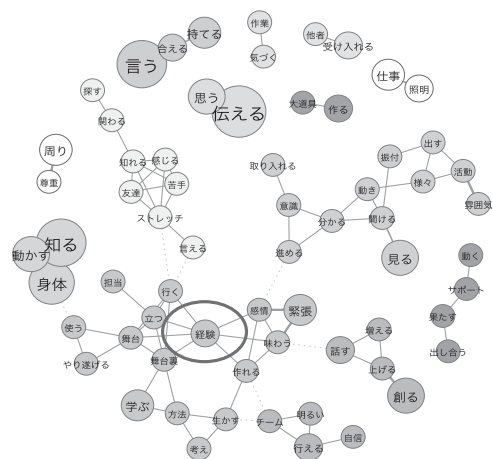


Fig. 5 あなた自身の良かった点（共起ネットワーク）

1-2 「今後どう伸ばすか」において発見された主なクラスター

次数を中心とした分析の結果、「どう伸ばすか」については、「生かす」というワードが核となり、「演技」「進める」「舞台」「計画」「立てる」などが強く関連付けられていた。その他、抽出語のクラスターは「意見－自分」、「雰囲気－仲間」、「舞台裏－打ち合わせ」、「相手－納得」、「アイデア－言う」、「役割－果たす－支える－違う－やり方－グループ－行事」などであった。



Fig. 6 今後どう伸ばすか（自己組織化マップ）

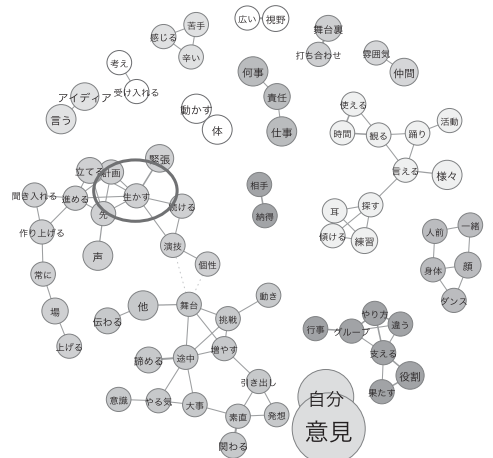


Fig. 7 今後どう伸ばすか（共起ネットワーク）

質問項目② 身体表現の講座を通して感じたあなた自身の反省点と今後どう補うか

質問項目②「反省点」、「今後どう補うか」についての記述をもとに「自己組織化マップ」と語と語の結びつきの強さを見る「共起ネットワーク（サブグラフ）」を作成した結果、Fig. 8～11のようになった。

2-1「反省点」において発見された主なクラスター

次数を中心とした分析の結果、「反省点」においては「踊る」というワードが核として抽出され、その周辺に「難しい」「伝える」「楽しい」「聞く」「提案」などが強く関連付けられていた。その他、抽出語のクラスターは「準備－ギリギリ」、「任せる－リーダー」、「踊り－人任せ」、「やる気－欠ける」、「時間－使い方」、「苦手－強い」、「グループ－振り」などであった。



Fig. 8 あなた自身の反省点（自己組織化マップ）

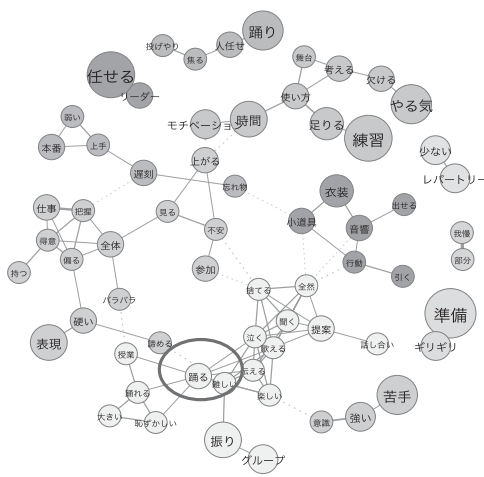


Fig. 9 あなた自身の反省点（共起ネットワーク）

2-2「今後どう補うか」において発見された主なクラスター

次数を中心とした分析の結果、「どう補うか」については、幾つかの核があり「継続－踊れる－一本番」、「学ぶ－見る－参考」、「全員－理解－込める－頑張る」などの強い関連性がみられた。その他、抽出語のクラスターは、「自分－意見－聞く」、「協力－言う」、「自分－意見－聞く」、「協力－言う」、「自分－意見－聞く」などの強い関連性がみられた。

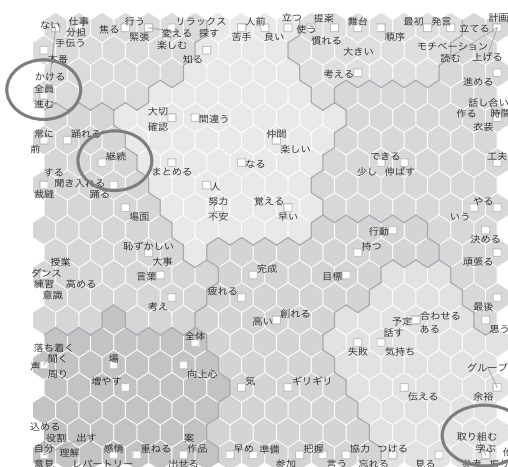


Fig. 10 今後どう補うか（自己組織化マップ）

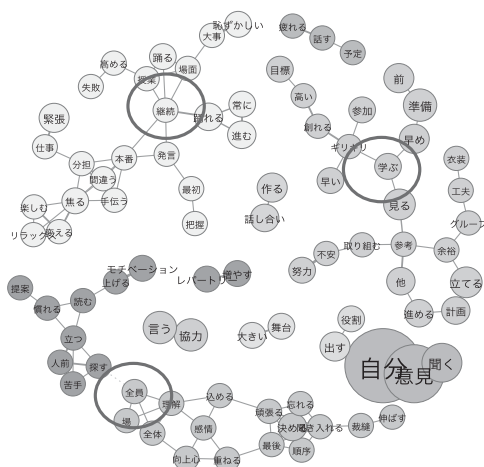


Fig. 11 今後どう補うか（共起ネットワーク）

し合いー作る」、「準備ー早め」、「決めるー頑張る」、「全体ー場」、「人前ー立つ」、「踊るー継続」、「リラックスー楽しむ」などであった。

質問項目③ あなたが子どもたちの表現をサポートする立場になった時、留意したいと考えるポイント

質問項目③「子どもたちの表現をサポートするときの留意点」についての記述をもとに「自己組織化マップ」と語と語の結びつきの強さを見る「共起ネットワーク（サブグラフ）」を作成した結果、Fig. 12、13のようになった。

3「子どもたちの表現をサポートするときの留意したいと考えるポイント」において発見された主なクラスター

次数を中心とした分析の結果、「子どもたちの表現をサポートするときの留意点」においては幾つかの核があり「初めてーステージ」、「間違えるー関わりー先生」、「作品ー創るー過程」などの強い関連性がみられた。その他、抽出語のクラスターは「子ー寄り添うーいる」、「意見ー取り入れる」、「声ーかけるー安心」、「創るー上げるー過程」、「踊るー好きー嫌いー対応」、「受け止めるー思いー考え」、「環境ー整える」、「様々ー工夫」、「身体ー動かす」などであった。

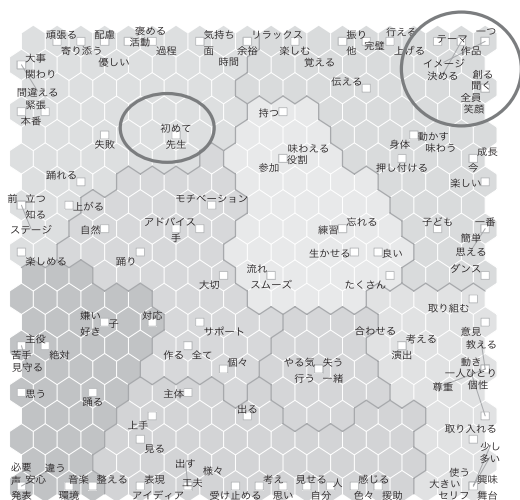


Fig. 12 子どもたちの表現をサポートするときの留意点（自己組織化マップ）

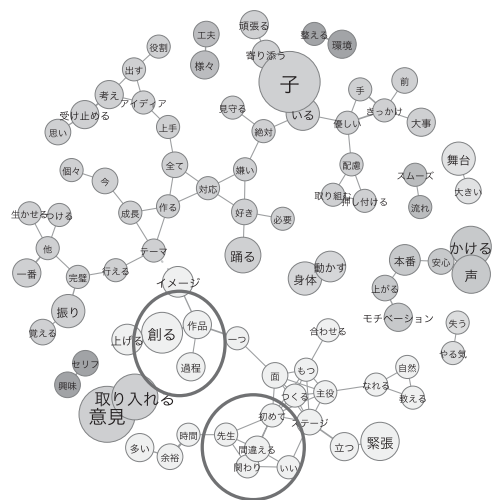


Fig. 13 子どもたちの表現をサポートするときの留意点（共起ネットワーク）

質問項目④ 身体表現の学習全体を通して感じたこと、考えたこと

質問項目④「身体表現全体を通して感じたこと、考えたこと」についての記述をもとに「自己組織化マップ」と語と語の結びつきの強さを見る「共起ネットワーク（サブグラフ）」を作成した結果、Fig. 14、15のようになった。

4 「身体表現の学習全体で感じたこと、考えたこと」で発見された主なクラスター

次数を中心とした分析の結果、「身体表現の学習全体を通して感じたこと、考えたこと」においては幾つかのワードが核として抽出され、「**リーダー**－役割－負担」、「**作る**－小道具」、「**伝わる**－実感－仲間」、「**興味**－持つ－久しぶり」、「**個々**－強い－出来上がる－苦労－残る」などの強い関連性がみられた。その他、抽出語のクラスターは「身体－動かす－改めて」、「嬉しい－見る」、「通す－感動」、「初め－不安－機会」、「仲間－実感－伝わる－実際－ステージ」、「踊る－合わせる」、「わかる－講座」、「持つ－興味－久しぶり」などであった。



Fig. 14 身体表現の学習全体を通して感じたこと、考えたこと（自己組織化マップ）

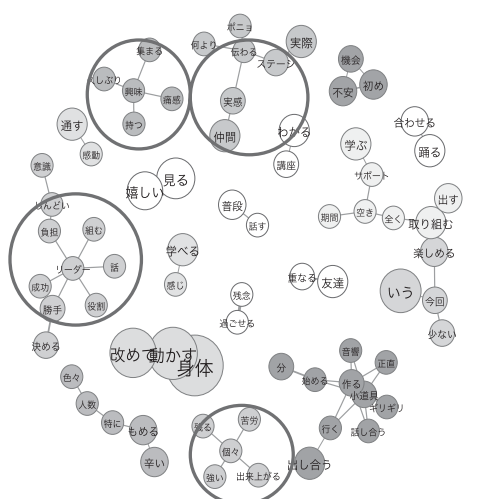


Fig. 15 身体表現の学習全体を通して感じたこと、考えたこと（共起ネットワーク）

(4) KH Coder による分析結果と考察

以上、自己組織化マップと共起ネットワークによる実態分析の結果、学習者は身体表現プロジェクトを通して、「舞台制作・作品創作・ダンスの振り付けや演出に関わる内容」のみならず、「チームの仲間との役割分担や協働の方法」や「その過程で生まれる様々なコミュニケーションを通じた感情体験」、「実体験をもとにした子どもの表現をサポートする際の留意点の学び」、「活動の計画性や制作作業の進め方」、そして「仲間を受け入れ、自他を尊重し尊重される体験」、「苦労の中から生まれた最終的な充実感や達成感、爽快感」、「仲間の存在を大切に思う気持ち」、「力をあわせることにより総和以上の力を発揮できることへの感動」など、多岐に渡った人間的な活動体験を踏んでいることが明白であった。

本研究では、こうしたワード間の関係性を深く言及するところまで至っていないが、これらの隣接するワード間の関係性を省察することによって、より学習者にとって有効な学習環境やアドバイスを生み出すヒントとなるのではないかと考えられた。

(5) 内省する身体の出現－学習者の内省的記述より

また、学習者の記述を見ると、どの質問項目においても「自分」というワードがかなり高

い頻度で抽出されている。たとえば、「自分の意見にこだわりを持ちすぎた」「自分が楽しんで子どもたちに伝えていきたい」「自分の役割を責任を持って果たしている」「もっと自分の意見が出せたのではないかな」などである。

こうした言葉からは、学習者が制作・創作などの協働活動において、主体となる自分ができるように行動したかをよく意識したことが伺える。「なぜ自分はこのように思っているのか」「どうして自分は仲間とうまくいっていないのか」「どうして自分はこんなに仲間との活動が楽しいのか」など、自問自答しながら活動状況を行っている実態があったといえる。こうした自己の活動についての再考が多数あるということは、多くの学習者が内省的に振り返るだけの実践知があったということであろう。またさらには、この内省は学習者に「どうして楽しかったのか」「どうしてうまくいかないのか」「うまくいかないということは自分は何が足りないか、どうすればよかったか」さらには、「その行動に出た理由は何だったのか」「何にのめり込み夢中になっていたのか」などのより深い内省へと連なっているものも見られた。以下、その一部を紹介する（Table. 3）。

Table 3 学習者の内省的記述（「2015年度後期 身体表現プロジェクト」事後調査より抜粋）

人前で何かをするのがあまり得意ではありませんでした。でも舞台を見たりするのは好きなので、「ステージで表現するって楽しそうだな」と思っていました。実際に舞台をやってみて、どんなステージでもどんなことも一人では決してできないと実感したし、仲間と協力するといろんな角度から一つのものが見られるなと感じました。そして何より、最初は恥ずかしさもあったけど、「こんなに楽しいんだ！表現するって楽しい！」と思い切り楽しむことができました。自分が楽しいと周りにも伝わるし、周りの楽しさも伝わってくる。気持ちって伝染するんだな、という実感がありました。大変だったけど、達成感も大きいし、皆でできて本当に良かったと思いました。
10人いれば10人のアイデアがある。それをどう一つの作品にしていけるかが本当に難しかった。ALIVE（身体表現プロジェクト）を通して、グループ制作の難しさ、楽しさ、どちらも体験できた。ものすごく頑張ったからこそ感動できたし、何より講義だけでは学べなかった自分の心の動きとか気持ちとかを体験できて、本当によかったなと感じました。この気持ちを子どもたちにも知ってもらいたい。
まず、大人数で何かを創り上げていく素晴らしさを感じられて嬉しかったです。プロジェクト学習は発表会以外でも周りを見る力をつけられると知り、この ALIVE をやり遂げた私たちはきっと素敵な先生になれると思いました。
身体を動かすことの楽しさ、皆で協力し創り上げることの面白さを学びました。子どもたちに伝えたいことを自分自身が実際に体験していないと伝えることができないと思いました。
本当に大学2年間の「ありがとう」がこみ上げました。もっともっと伝えなければいけなかった。いろんな人の本当の意味での「その人」を見ることができた。良い悪いがあって当たり前。そういう広い目で、余裕のある目で保育をしていきたい。
数分間の本番のために、何日も何週間もかけて作り上げてきて協力し合ってやってきて、頑張ったからこそ達成感のある本番になるのだと感じました。揉めたり、グループが崩れかけたり、泣いたりすることもあったけど、本当に心から成長できる授業だと思いました。
体育は好きだけどダンスは苦手意識を感じていました。でも苦手中ダンスの得意な人に教えてもらい、できるようになりました。ALIVE（身体表現プロジェクト）でもお互いに協力し合い、頑張って色々なことを乗り越えて良いものができたと感じます。本当に良い経験ができ成長できた授業でした。ありがとうございました。今まで一番楽しくて心に残る授業でした。

自分の思っているイメージがなかなか上手にダンスとして表現できずとても苦労しました。でもその分達成感が物凄くあり、終わった今本当にこの授業を受けてよかったと思います。始めた時は、ただ楽しさしか感じなかったけれど、今はこの大変さも含めてとても晴れた気持ちです。この今の想いを忘れず、子ども達に伝えていきたいです。
ダンスや衣装、道具など最初から全部考えて、創り出すことはとても大変だと思いました。しかしその分本番が楽しく、終わることができ達成感もありました。保育の場で、先生たちは全部考えていたことに気づき、子ども達にも楽しく発表会をしてほしいと思いました。私自身が楽しめないといけなかったと思います。
体を動かし表すことの楽しさ、皆で協力して創り上げることの面白さを学びました。子ども達に伝えたいことを自分自身が実際に体験していないと伝えることができないと思いました。
どんなに小さな動きも、自然と行っていることもすべて表現で、身体を動かすことの楽しさを感じました。
ALIVE（身体表現プロジェクト）が終わり、クラスが一つにまとまった気がします。短大生活は今までと違いみんなで何かをすることが少なく、個々がバラバラというように感じていました。ですがALIVEを通して、みんなの涙を見て、みんながクラスのことを大切に思っている気持ちがあることに気づきました。みんなで何かをして、協力をしてということは本当に大変なことです。色々な人がいる中でそれぞれ寄り添い合うことは、大人になるとどんどんできなくなります。それが今回できて楽しめたことが、とても嬉しく感動しました。みんなが楽しかった！！と思えるようにするためには、やはり一人一人が尊重されることが大切だし、一人一人が心から楽しめることでいい作品になるのだと思いました。
個々のちっぽけな存在が団結して、個々の力を発揮することで大きいものが出来上がるということ。一人でも欠けたら違うものになってしまう。自分たちで苦労して頑張った作品ほど思い入れがあって、思い出に強く残る。
普段本気でぶつかることもあまりない人と、ぶつかり意見を聞くことができるのは、自分としてはとても新鮮でおもしろいものでした。

これらの内省的記述からも明らかであるように、自己や他者について深く内省する経験が、より人間的な深み（＝人間力）を引き出しているといえる。そして近い将来、保育という現場で、人を育て、育む立場になる学生が、主体的に「面白いこと」「楽しいこと」「大変なこと」「辛いこと」を身体で経験し、協働する場を共にする中で、体験したことを実践知として自分の言葉で語れるということは、自己の成長を客観的に捉える経験、あるいは足りなかった思考を補う経験ともなり得るだろう。こうした学びは、紛れもなく個ではなく他者と共に自己組織化していく中に見出されたといえる。

(6) 身体表現プロジェクトの自己組織化マップを活用した活動援助の提案-個の自立と全体バランス

以上、学習の場で生じている自己組織化の実態把握を試みてきた。これまでも、ダンス自体が持つ教育的な効力や学習者に与える達成感や感動などについては多くの研究者たちがその熱意と共に実践と研究を深めてきている。本研究では、その中で生じている学習者の実態を「自己組織化」という現象から展望し、学習者の内面に重なる人間力の育ちを客観的に捉えたいと考えた。そして、確実に獲得されている人間力の源となる体験がどこにあり、「個の学び」ではなく仲間やチームと自己組織化を図る中でこそ、築かれる学びの実態を明らかにするために分析を行った。そして、自己組織化された学びは、より主体としての学習

者個々の活動を引き出し、内省を深めること、また活動を豊かにスケールアップし、自分自身の学びとして深く、大きく広がることが、視覚的、或いはイメージ図として示すことができたといえる。そして指導者は、これらのイメージ図を一つの手がかり、あるいは参考資料としながら、学習が営まれるその場で現れる様々な現象や学習者の心の動きをキャッチし、学習の方向性を予測したり、課題設定に活用することで、より学習場面に即した多様な指導の糸口を引き出すことが可能になると考えられる。

しかし一方で、本研究の考察を深める中で、その実態を一つの「図」として提示することの危険性も感じられた。よって、これらはあくまで手がかりに過ぎないことを提言しておきたい。これらの図と図、或いは図の中に含まれるクラスター（語と語の塊）同士を結びつける有機的な力は、その現場に立ち会う指導者や学習者の気づきや解釈によって、方向付けられる可能性が高い。つまり、指導者がこれらの資料を元に、関連性のありそうなクラスター同士を意識し、学習者に「気づき」や「自覚」を促すことで、今すべきこと、不足していること等の課題をより明確に伝えることができるだろう。

しかし、体育やダンス等の実技指導においては、その場での指導言語が学習者に大きな影響を及ぼすことが分かっており、経験のある指導者ほど、その場に応じた適切な指導言語を選択することができるという。身体表現プロジェクトにおいても、一度きりしかない制作過程の中で、その場で、瞬時の作品指導が必要であり、適切な場の状況把握や実践レベルの把握が非常に大切なものとなる。こうした指導言語の選択を行う場合も、KH Coder による共起ネットワークのクラスターや自己組織化マップは有益な参考資料になる反面、指導者による強い思い込みと方向づけが学習者の学びを狭めてしまう可能性も否めない。

一方、クラスター間の関係性を概観した結果、身体表現プロジェクトの制作過程には、成功パターンと失敗パターンが明らかに存在することがわかった。例えば、時間管理、役割分担、計画性、そして主体性、仲間との関係性などである。指導者は、こうした学習者が辿り着く着地点についていくつかのパターンを事前に把握しておくことで、学習者の置かれる状況や抱く課題について予測し、多様に対応しやすくなるだろう。そして、指導面でのゆとりを持って毎回新鮮な気持ちで学習場面の織り糸の一つとして中に入ったり、風通しを良くしたり、触媒になったりと、より多様な方法で関わっていくことができるかもしれない。

また、別の角度からこうした自己組織化マップのような実態を図化する試みを考察すると、明らかに抜け落ちてしまう本質へのフォローにも留意が必要である。つまり図はあくまで現象のごく一部を切り取ったものでしかないということを踏まえておかなければならない。拙者も長く実践するボディワーク野口体操の創始者野口三千三は、人間の身体やその動きにまつわる現象を「まるごと全体」^{xiii} という概念でとらえていた。ようやく今身体や現象をこうした「まるごと」という形容詞で表されることが始まったように思うが、こうした全体性を伴う現象の分析においても引用できる概念の一つであろう。つまり、ダンス授業に見られる自己組織化を有効に引き出すためには、野口が実践した「個としてそれぞれ自立しながら、お互いにゆるやかな関係を保ち続ける方法」^{xiv} つまり「個」と「全体」のバランスを見ることがあると考えられた。羽鳥はこうした野口の立場について後に「仲間同士、執拗な束縛をしない、出入り自由な関わり方」^{xv} であると述べている。つまり、学習者それぞれが、個々人として体験を自立させることで、より仲間との有効な組織化が生まれるということである。個が自立しなければ成り立たない表現学習においては当然と言えば当然の立場ともいえるだ

ろう。しかしダンスの得意な人、できる人、意見を強く主張できる人だけの表現の場ともなり得るダンス学習において、こうした「個」の自立を促し、全体バランスを生み出す指導は、今後こうしたダンス授業における自己組織化のキーワードにもなってきたであろう。

そして、こうした個と全体をつなぐものとして、今回の学習者の内省的記述より、からだとかからだ、心と心の間にある想いを言葉にした「声かけ」やふとした「気遣い」、いつもと違う仲間への「気づき」などが見出された。これらがおそらく学習者間の「間」とも「ゆとり」とも「接点」ともいわれるシーンで触媒となり、有効な自己組織化を促していたと考えられた。しかし学習者が記した内省的記述は、限られた言葉（記号）で記された体験の一部でしかなく、数としては不十分なものであった。もっと知りたい重要な、そのことばとことばの「間」にあったものは、現場に立ち会った人の肌、或いはその本番の瞬間、最も濃度が高い状態にあり、その後は余韻となって時間と共に薄まり、消えてしまった可能性が高いと考えられた。しかし、それらがデータとして取り込めないまぎれもない「自己組織化」の重要な因子であり、人間力が目覚める何らかの心なり空気なりの動きであったことが考察された。

まとめ

今回の分析では、最終的にテキストマイニングという手法を通じて、多様に記述された学習者の言葉をふるいにかけ、見えないものを見えるように、皆が感じ考えたことを立証できるようにとデータを分析し考察を深めてきた。自己組織化の周辺を漂う多様な体験学習と人間力を培う因子については、ぼんやりとはあるが、浮かび上がり、その存在に対して確信を持てたと感じる。こうした考察は、大変場当たりので学問としてはまっとうではないような、言葉にならないものを文字に置き換えていくような学びの探求の仕方ではある。しかし、一つの正解を提示するためではなく、限りなく多様な実践と現象がいつも学習者の数だけ存在し、人間が本来的に持っている「人間力の目覚め」に利く学習アプローチのひとつとして自己組織化の視点があること、その全体像へのアプローチが拓けたと考える。こうした事実の破片を少しずつ拾い集め、目の前の学習者と共に重ねる実践の中に浮遊している本質を浮かび上がらせることを今後も課題にしていきたい。

引用文献

- i 古市久子、伊藤数馬 「総合表現の教育的価値は何か～哲学的視点から考える～」 東邦学誌第42巻第2号 2013年 67頁
- ii 佐藤学 『カリキュラムの批評 ― 公共性の再構築へ ―』 世織書房 1996年 4頁
- iii 池田（尾畑）三鈴 「身体表現プロジェクトが保育学生にもたらす原体験を考える ― 養成課程におけるプロジェクト学習の位置付けと方向性の検討より ―」 東京成徳短期大学紀要第49号 2016年 21頁
- iv 野中郁次郎、勝見明 『全員経営 自律分散イノベーション企業 成功の本質』 日本経済新聞出版社 2015年 153頁
- v 野中、勝見 前掲書 47頁
- vi 高尾隆、中原淳 『インプロする組織』（株）三省堂 2012年 72頁
- vii ヤングアメリカンズ：1962年、若者の素晴らしさを音楽によって社会に伝えようと、ミルトン・C・アンダーソンによって設立された非営利活動団体。音楽公演と教育が活動の二本柱である。ヤングアメリカ

ンズは1992年から「アウトリーチ」と呼ばれる教育活動を南カリフォルニアでスタート。このアウトリーチ活動の背景には、90年代初頭に全米でおこなわれた教育予算の削減とそれに伴う必須科目ではない音楽などの芸術授業の削減がある。芸術授業の削減によって奪われた子どもたちの能力を伸ばす機会、表現する機会をこのアウトリーチ活動によって学校に復活させることが目的であった。内容としては、音楽とダンスの先生として約40人のヤングアメリカンズを学校やコミュニティに送り、小・中・高校生たちと一緒にわずか3日間（地域によっては2日間）で歌やダンスのショーを作り上げていく。ヤングアメリカンズが第1幕を、そして第2幕では参加者の子どもたちがヤングアメリカンズと共演する。世界共通言語である音楽を通して数百人の子どもたちが共に学び、お互いの強みを尊重し、自分の可能性を発掘していく。2001年からヨーロッパに広がり、2006年には初来日を果たした。現在、ヤングアメリカンズには17歳～25歳の若者が約300人在籍しており、ミュージックアウトリーチの活動は多くの大学で単位として認定されている。（NPO 法人じぶんみらいクラブ HP より一部抜粋）

- viii ヤングアメリカンズにおける教育的目標：①参加者一人一人が他人と違った個性をもっていることを認識し、自信を獲得する（SELF WORTH）／②自分と違った感じ方をする他人の大切さを学ぶ（RESPECT FOR OTHERS）／③感じたことをそのまま表現することの大切さを学ぶ（PERFORMING ART）／④みんなで一つのことを真剣にやり遂げることの素晴らしさを学ぶ（TEAM WORK）（NPO 法人じぶんみらいクラブ HP <http://jibunmirai.com/ya/program/purpose.html> より抜粋）

ix 池田 前掲書 7頁

x 池田 前掲書 8頁

Fig. 3 に示すように、アクティブ・ラーニングでは「社会的・職業的自立、社会への円滑な移行に必要な力」の育成が見通されている。そこで示される学習の構図では、「A 専門的な知識・技術」と「B 基礎的・基本的な知識・技能」で挟む形で「①基礎的汎用的能力」、「②論理的思考力」、「③創造力」、「④意欲・態度」、「⑤勤労観・職業観などの価値観」が示されている。さらに、「①基礎的汎用的能力」には「課題対応能力」、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「キャリアプランニング能力」などが含まれており、「問題解決（課題達成）を中心に据えた学習者自身が行う学習能力」が含まれている。

xi 池田 前掲書 8頁

- xii 本研究でテキスト分析の際に作成した「共起ネットワーク」とは、テキストの中で用いられた単語を個々の要素（ノード）とし、単語と単語の共起性をリンクするネットワークのことである。共起ネットワークのグラフ結果については、ある要素を通る経路が多いほど中心性が高いとする計算によって算出される「媒介中心性」を採用した。また各要素間の関連性というクラスターを確認するために、サブグラフ検出による描画を採用した。

xiii 野口三千三 『原初生命体としての人間』 岩波書店 1996年 iii頁

xiv 羽鳥操 『野口体操 自然直伝 ― 野口三千三語録 ―』 柏樹社 1999年 147頁

xv 羽鳥 前掲書 146頁